

## 仏教学のフロンティアと比較思想

——言語論的転回からの照射——

下田正弘

### 一 人文学をめぐる現代の状況から

仏教学の最前線で起きている問題を比較思想という場においてとらえなおそうとするとき、人文学全体がかかえる方法的課題に立ちもどる必要がある。これまで幾度か論じたように、仏教学における重要な思想的課題は、存在論、意識論、言語論の三者の内実と相互の関係をいかに扱うかにかかっている。これら三つの要素が構成する形状は、バランスのとれた正三角形になることが、理念的には望ましいのかもしれない。だがあらゆる学術がそれぞれの学知の構築を目的とする以上、広い意味での言語論は存在論と意識論とを架橋し、あるいはときに包摂する。

この点にかんして人文学は現在、二つの異なった動きが交錯する、やや複雑な状況に立ちいたっている。第一の動きは、人

文学の中心的権威である歴史学をめぐる前世紀後半から本格化した「言語論的転回」である。この課題は諸分野においていまだに十分に対応しきれていない。第二の動向は、今世紀に入ってからわかに顕在化してきた、哲学における「新たな実在論」の出現である。この動きは出現したばかりでまだ評価が定まっているわけではない。けれども第一の動きを超えようとするこの企図は、第一の課題を論ずるうえでも視野に入れておく必要がある。

第一の課題である言語論的転回を主導する、歴史、哲学、文学研究における、ヘイドン・ホワイト、ジャック・デリダ、ポール・リクールといった論者たちは、第二節でみるように、存在と意識の問題は言語——詳細には言述 discourse——の地平を逃れえないという事態を詳細に解明し、それまで隠れていた事態を顕在化させた。この理解は、存在の問題を意識の地平へ

と回収しつづけてきたカント以降の近代哲学が至りついたひとつの到達点である。一見、極端にみえるこの主張は、人文学諸分野の成立を方法的に規定する根本的な課題提起となっている。

それに対して、カンタン・メイヤスーやマルクス・ガブリエルといった論者たちに代表される、新たな実在論という第二の課題は、存在の問題を意識からも言語からも切り離し、単独に扱いうる可能性を提起している。これは言語論的転回に対する批判をたぶんにくむが、とりもなおさず近代哲学が進んできた方向に対する疑義の提起である。

周知のごとくカントは物自体を立てつつ、それを意識が直接に把握しうる可能性を慎重に排除した。ここで存在と意識とのあいだに引かれた一線はその後の歴史において強力に作用し、哲学者たちは存在を意識の側に引きとつたうえで哲学成立の原理を立てようとしてきた。カント以降のこうした流れを構築主義<sup>(2)</sup>ということばで包摂する理解は、近代哲学のおよその傾向を把握するうえで有益である。なにより考察の軸を存在の側に引きもどそうとする企図は、哲学的思惟から排除されがちだった宗教の意義を復権するのみならず、西洋思想の枠に収まらない東洋の形而上学の特徴を把握する可能性までも示しているようにみえる。

こうしたあらたな可能性を秘めながらも、この論者たちは言語論的転回という重要課題をあまりにも急ぎ足で駆け抜けた

め、転回が人文学全体にもつ大きな意義を正当に評価しそこなっている。ポストモダンリズムに位置づけられる転回の論者たちは、西洋形而上学の流れを総括するのみならず、言説の場の意義をきわめてゆたかに切り拓いた。ここを押さえることなしに人文学の、また仏教学の方法的課題を適切に論ずることはできない。こうした理解に立ち、本稿は、言語論的転回が仏教学に与える意義の要所を紙幅に応じてたどっておく。

## 二 仏教学の最前線から

存在と意識の問題を言語の側に引きとる言語論的転回について、この分野をリードする歴史学者のひとりには「言語が諸記号の自律的な体系であることを強調し」「記号のもつ意味がなにか本源的ないし先験的で言語外的な基盤との関係によって決定されるのではなく、諸記号のあいだの諸関係によって決定される」とみて「言説 discourse の由来を外部の言語以前の参照点に求めることを斥け、言語がリアリティを反映するという観念を回避<sup>(3)</sup>すると述べる。

この理解が研究に与える意義を把握するためには、大乘仏教の起源をめぐる最先端の論争に目を向けるのが分かりやすい。現在、古代インドにおける大乘仏教運動の起源が大乘經典の出現にあることは、文献学と考古学をうほうの研究からほとんどの研究者に認められている。では大乘經典はいかにして誕生したのか。この回答として準備されているいくつかの仮説は、い

ずれも大乘經典の「作者」とその内部の意識や外部の環境をめぐつての想定である。そのうち古くからある有力な議論は、大乘經典形成の起源には「作者」が経験したであろう三昧や禪定が存在し、それを通しての意識の変容が經典形成の動機にあるとみるものである。

この理解は、言説外の体験の問題をテキストの言説考察の基礎にしうるのかというラディカルな問いをふくむばかりでなく、禪定体験を基礎とする仏教理解を徹底批判する批判仏教の評価とも密接な関わりをもつ。最近年では Lambert Schmithausen, Robert Scharf, Eli Franco, Christian Lindner がこの問題をめぐつて異なる立場から議論を交わしているものの、研究者の議論は総じていまだ甲論乙駁の様相から脱し切れていない。

この問題を適切にあつかうためには、言説、体験、時間、ことに過去の実在、歴史に関わる問題を精密に分析しておかねばならないにもかかわらず、仏教研究においてはそれがなされていないのだ。批判仏教論者にもこの視点は欠落しており、ここにメスを入れなければ長い膠着状態が解消されることはないだろう。この課題に正面から立ち向かったテキスト研究、それが言語論的転回の主導者たちにほかならない。

### 三 過去の実在をめぐつて

#### ——ポール・リクルの考察

大乘經典成立の背後に三昧や禪定における「作者」の意識の

変容を想定しうるためには、テキストの言説をとおして過去が追体験できるという事態の内実がまず解明されていなければならない。かつて論じたように、テキストの言説を読みとぎながら過去の宗祖の体験の追体験を志向する論者たちには、いまは消滅したけれどもかつて存在した過去がテキストの言説のうえに存在し、その言説をとおして他者である宗祖の過ぎ去つた経験を自身がいま現に経験しうるとの了解がある。だがいかなる経緯でこれが可能となるのか。以下、この問いへの歴史学者たちの対応をリクルの研究からとりあげる。

過去のできごとの追体験を歴史家の重要な仕事とみなす代表者ロビン・コリングウッドがその過程の分析として提示するのは、第一に、できごとを、思念 (Thought, 思考されたもの) というできごとの内面と自然的变化に属する物理的現象としてのできごとの外面とに分離し、第二に、できごとの連関を再構成する歴史家の思念を過去において思念されたものの再思念とみなし、第三に、この再思念を最初に思念されたものと数的に同一のものともなすことであつた。一見すると単純な行為をいたずらに複雑なプロセスに分岐させているように思えるかもしれない。だが經典の記述に經典「作者」の冥想時の意識変化を辿っていると確信する研究者や、論書における論理展開に著者の哲学的思惟を追跡していると自負する研究者が、現在の痕跡になにゆえに他者の過去の思念が存在し、それが自身に現に認識されうるのかと問われるなら、ここで示されたプロセスはその

有力な回答のひとつとなるだろう。

けれどもこの説明は以下の二点において不都合を来す。第一にこのプロセスにしたがえば、歴史家は他者の行為を体験しているという自己認識を得ることになるけれども、自己存在に属する過去についての思考から他者存在に属する過去についての思考に無媒介には移行できない。反省の同一性 *identité de la réflexion* は反復に関わる他性 *l'altérité de la répétition* を基礎づけえない。第二に追体験が過去のできごととの同一性を実現するのだとすれば、追体験という自己の行為は過去の他なるできごとに吸収され、それ自身の固有性を消失させてしまう。コリングウッド自身が認識しているように、この理解は自他の隔たりのみならず、過去と現在という時間的隔たりも無化してしまう。他者による最初の体験とは差異化される〈追〉体験 *re-félicitation* が可能となるためには、同一性への回帰のみでは不十分である。

これに対してポール・ヴェーヌ、ミシェル・ド・セルトーといった歴史家は、歴史研究から実体的過去の概念を排除するとともに、過去の記述から得られる表象の意義を捨象して、現在の眼前に展開する差異性や他性の問題として歴史を描こうとする。これはコリングウッドの立論にまつわる問題を解消するものの、それと引き換えに、現在における過去の存続の意義を消し去るというあらたな問題を生ずる。脱時間化されたうえで抽象的体系に関係づけられることで意味を付与されるこれらの差

異は、現在は不在で生命を欠きながら過去には実在し生きていたものの代理にはなりえない。

こうした問題を解決するのは、項と項のあいだではなく、関係と関係のあいだを喩論 *topology* によって明確化するヘイドン・ホワイトの歴史理論である。レオポルト・ランケの「それがじつさいにあったように *wie es eigentlich war*」という表現に象徴されるように、代理表出は「のように」の表現を介することによって歴史に独自のカテゴリーをしめす。上述の仏教研究の問題点もホワイトの理解を参照することによって見通しが開けるだろう。

#### 四 歴史学の言語論的転回

——ヘイドン・ホワイト

大乘經典の「作者」の意識を經典の記述から読み取ろうとする研究者たちが論じていない重要な課題は、なにゆえに經典の言説をそのまま、想定される過去の作者の意識の内部のできごととして扱いうるのかという方法論の問題である。これこそテクスト、より正確にはエクリチュールが、意識の場と重なりあう事態をこのうえなく厳密に論じるジャック・デリダの中心的テーマである。ただ、これについては紙幅の関係からここでは割愛し、それに代わって、二十世紀後半、それまでの歴史哲学の流れを変えたヘイドン・ホワイトの分析を引く。というのも、ここに記した仏教研究者たちはいずれもテクストの言説の

分析をしつつ、みずからテキスト作者の意識内部にある自覚をもち、それが自身をして「歴史研究者」と意識させるに主要因となっている。この経緯を明らかにすることが仏教学の方法論を適正化するうえで重要だからである。ホワイトは主著『メタヒストリー』においてつぎのようにいう。

歴史家は、歴史の場の史資料に表現や説明のための概念装置を適用する前に、まずその歴史の場をあらかじめ形象化 pre-figure しなくてはならない。つまりその歴史の場を精神的な表象の対象 object of mental perception として構成しなくてはならない。この詩的な行為は、歴史の場を特殊な種類の領域としていつでも解釈可能な状態にする言語行為と同じことである。言い換えれば、ある領域は、それが明示的に解釈される前には、そこで識別できる形象を内包している基盤として解釈されなければならない。……言葉<sup>①</sup>を換えれば、歴史家が歴史の場で直面している事態は、文法学者が新しい言語を前にしたときと同じ具合なのである。

ここには歴史家による言述の構成と意識の構成との密接不可分な関係が記されるとともに、仏教研究者たちが經典の言説にいかなる意識をもって向き合っているかが正確な表現によって示唆されてもいる。歴史家の場合からみてみよう。

歴史の資料は歴史として説明可能な対象となる以前に、なんらかの理解を生み出すための先行的形象にかたちづくられる

必要がある。それは爾後になされる歴史叙述の舞台となるためであるとともに、歴史家自身の認識における表象の対象とするためである。したがって歴史家にとって資料という対象は、たんに研究対象という客観にとどまらず、歴史家自身の意識を構成する主観ともなっている。言説 discourse は外化された認識の場であり、研究者はじつさいにはこの言説を通して自己の内部の理解を構築する。

あらためて言語と思考との関係を考えれば、これはなんら特異な主張ではない。けれども西洋哲学においてはこれまで言語を超えた實在を指定するロゴス中心主義が強固に根づいていたため、人文学の研究者たちもこうした言語の役割に中心的焦点を合わせてこなかった。ここにいたれば、追体験について意識と存在の二者の関係で解明しようとしたコリングウッドの限界がみえてくる。ひとつのできごとを非時間的な思念と時間的な現象に分断させてしまったのは、歴史学における言説の役割を正当に評価しえず、存在を意識の側で引きとろうとしたために起きている。だが歴史研究において、言説空間を措いて意識と存在が投影される場はない。歴史家の仕事<sup>②</sup>が文法学者の仕事と重なるのも、意識の次元の課題もふくめた過去の復元が過去の言説の次元における解説にかかっているからである。

こうした歴史家の行為を仏教学における研究と照合するとどうなるか。一般にいまだ意味を読み取れる段階にはない歴史学の生の史料とはちがひ、大乘經典の言説はすでに形象化され、

読者に十分な認識を喚起する言説として存在している。仏教研究者がなすことは、この言説の場の形象をたどり、理解しやすい意識の場として、研究者自身の言説をもって再構成することである。

ここで留意すべきは、第一に、言説の再構成がめざす理解しやすさは、あくまで現代の研究者の意識にとつてのものであること、第二に、それにもかかわらず再構成された言説の場はほとんど無条件に過去の経典「作者」の意識内部に同定されてしまっていることである。だがここで再構成される内容は、二千年前の古代インドの痕跡に照合されないあいだは、歴史研究の成果として承認されえない。

じつはこの問題は大乘仏教の歴史研究以上に「初期仏教」の研究に深刻である。現在学界に提示されている「初期仏教像」の重要な根拠は、東南アジア諸地域の文字で記された、ほとんどが十八〜十九世紀の写本に記された内容にある。仏教の故郷からはるか遠く離れた地域にある、二千年以上もの時の隔たりをもつ写本における言説の分析を、古代インドを復元する歴史研究と認識させてしまうもの、それは中期インドアリア語研究をはじめとする歴史言語学への強い信頼である。つまり「初期仏教」の歴史は、ホワイトの指摘のとおり、文法学者による言語研究によって構築されており、言語論的転回による批判のただなかにある。それにもかかわらず仏教研究者たちは、言語論、テキスト論を経ることになしに、過去についての存在論と

意識論とに直截に向きあい、その考察結果を歴史研究として承認しうるものと理解している。いまや方法論における根本的な反省が迫られている。

\*本稿は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(S)「仏教学新知識基盤の構築——次世代人文科学の先端的モデルの提示」における研究成果の一部である。

- (1) 最近では下田正弘「井筒俊彦が開顕する仏教思想——比較宗教思想的地平から如来蔵思想をみる」鎌田繁・澤井儀次編『井筒俊彦の東洋哲学』慶応大学出版会、二〇一八年、二〇七〜二〇三頁。
  - (2) マルクス・ガブリエル「なぜ世界は存在しないのか」清水一浩訳、講談社、二〇一八年、一〇頁。
  - (3) S. Jones, "The Determinist Fix: Some Obstacles to the Further Development of the Linguistic Approach to History in the 1990s," *History Workshop Journal* 42: 19-35, rep. in G. M. Spiegel (ed.) *Practicing History, New Directions in Historical Writing after the Linguistic Turn*, New York and London: Routledge, 2005, p.63.
  - (4) 議論は L. Schnitzhausen, *The Genesis of Yogācāra Vijñānānanda: Responses and Reflections*, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies, pp. 599-607 を参照。
  - (5) 下田正弘「変貌する学問の地平と宗学の可能性」智山勧学会編『日本仏教を問う』春秋社、二〇一八年、二〇七〜二四一頁。
  - (6) 以下この節は P. Ricœur, *Temps et récit: le temps raconté*, tome 3, Éditions du Seuil, 1985, pp. 256-283 の趣意である。
  - (7) H. White, *Metahistory: The Impagination of Nineteenth-century Europe*, The John Hopkins University Press, 1971, pp. 26-27. 『メタヒストリー』岩崎監訳、作品社、二〇一七年、九二〜九三頁。
- (しもだ・まさひろ 仏教思想 東京大学教授)